

## 和菓子、洋菓子、はなやかなのは？

弘前大学教育学部附属中学校

小島 わこ

「ぼつとしねえんだよな、和菓子つてのはよ」。主人公がはたらく和菓子屋に来た酔っぱらいの男が言った言葉。私はこの場面を読みながら、接客をしている主人公と同じように、ムツとした気持ちになった。

頭の中で、和菓子派の私と洋菓子派の私が討論を始めた。

洋菓子は見た目もぼつとはなやかだし、クリームやチョコなどたくさん味の種類がある。しかしそれに対して和菓子は洋菓子ほどはなやかでもなく、味といっても全部とはいわないがほとんどがあんこのイメージ。洋菓子が有利だ。確かに私も和菓子は好きだが、洋菓子と比べてしまうと地味なところがあると感じていた。

しかしそれは「和菓子は地味」という固定観念にとらわれ、和菓子のはなやかさを知らうともしなかったからだろう。この本を読んで、洋菓子に負けないはなやかさ、バリエーションの豊富さ、そしてなんといつても和菓子の名前の美しさにおどろかされた。

主人公の梅本杏子は、デパ地下のみつ屋という和菓子屋でアルバイトをしている。私の心に残った場面は、地下食品フロアへ広報からお知らせがあつて、「今まで秋といえば食欲の秋でござりとしたメニューで売っていたが、今年は量より質、お得感より特別感をキーワードにメニューを組み立てていただきたい。」店舗側の方はメニューが決まり次第、フロア長に提出して下さい、と言われた後の場面だ。みつ屋の店長は秋のフェアにおはぎを使うことにしたが、広報の女性が「おはぎなんて陰気でもつさりしてるわ。もつとはなやかな生菓子とかに変更してくれない？」と言うのだ。杏子が悔しい思いで話を聞いていると、みつ屋に来ていた和菓子職人が広報の女性に声をかけた。

「おはぎくらい面白い菓子なんて、なかなかないぞ。おはぎは名前で七変化するんだ。」

そうやって話し始める。まず春ならばぼた餅、秋ならおはぎ。この二つは同じものだが、ぼた餅があんこだけなのに対

し、おはぎはきな粉やゴマをつけたりする。おはぎは半搗ぎの状態で、搗かずに作るからつきしらず、それに月をあてはめ「月知らず」、月が見えない方角で「北窓」。こんな調子で七つの名前を説明するのだ。

私は初め、広報の女性の言うことはわからなくなかった。おはぎなんてお彼岸ばいし、もつと他にはなやかなものがあるはずだ。しかしこの場面を読んで、おはぎはなんておもしろいお菓子だろうと思った。そして、同じものに七つもの名前をつけられる日本人の頭のやわらかさに感心した。

店長はその説明のあとに、

「お菓子の名前って、駄洒落とか言葉あそびみたいなものも多いんですね。そういうのって、一つの文化だと思うんです。」

こう言った。こうして、おはぎを使うことを認められたのだ。この本の中には他にも、いろいろなお菓子の名前が登場する。例えば「おとし文」というお菓子。「巻いた葉とそれにとまる露を模して」いる。そしてこの「おとし文」という名

前は、「こういった形に葉を落とす虫の仕業を見た人が、まるで紙を巻いて落としてある文のようだと感じたことから名づけられたお菓子」ということだ。こういったおもしろいお菓子の名前がたくさんでてくる。

お菓子の名前は一つの文化。私はあらためて、日本語はすばらしいなと思った。

この本を読んで、私の中の「和菓子は地味」なんて固定観念はどこかへいつてしまった。

「餅もあればどら焼きみたいなふわふわの生地もあるし、かりかりのかりんとうだってある」。味も季節によつて「梅とか柚子とか柿とか、色んなフルーツが使われてる。」バリエーションは決して洋菓子に負けていない。それに和菓子は「名前」まで美しいのだ。私は今までよりも和菓子が好きになったが、もちろん洋菓子がきらいなわけではない。どちらにもそれぞれの良さがある。ただ、前までの私のように「和菓子は地味」だと思っている人もいるだろうから、そんな人にも和菓子のほなやかさが伝わると思う。